

トーマス・フリードマン著「ベイルートからエルサレムへ NYタイムズ記者の中東報告」

朝日新聞社 1993年7月10日刊を読む

ベイルートからエルサレムへ NYタイムズ記者の中東報告

1. 「窓ガラスが売れなくなって、何週間にもなるんだ」とヒジャルは嘆いた。「それが、どれくらいひどいか本当に知りたいかい。実にひどい。ひどすぎて、ぼくは自分のアパートの窓が全部撃たれて割れてしまったというのに、ガラスを取り替えることさえできないんだ。本当さ。うちの窓が壊れたのはこれで4度目だ。今度はビニールを貼っただけで済ましている。毎日ロケット弾が飛んでくるといのに、どうしてガラスなんか入れられるかい」
2. まったくその通りである。84年初頭、海兵隊本部への攻撃とシューフ山地の戦闘で空にたち上がったキノコ雲はベイルート上空にまで広がってきた。私は全市が結局は茶色のスーツを着た男と同じように苦悶の死を迎えるのではないかと思い始めた。
3. しかしなぜ、だれもがこの町の死をそれほど憂慮しなければならなかったのだろうか。
4. なぜならベイルートは単に町であるだけではなかったからだ。それは、一つの象徴であった。レバノン人にとってだけでなく、全アラブ世界にとって何かを意味する象徴なのである。いまでこそ「ベイルート」という言葉を発しただけで地上の地獄絵図を呼び起こすが、ベイルートは久しく、おそらく正確ではないにしろ、それとは極めて正反対の、寛容な町を代表してきた。そこには共存の理念と寛容の精神があった。そして多様な宗教社会、すなわちシーア派、スンニ派、キリスト教そしてドルーズ派が一つの国、一つの町で、お互いのアイデンティティをまったく捨て去る必要がなく、共に生活し、繁栄すらしてきた。
5. ベイルートの精神はレヴァントの精神として知られてきた。「レヴァント」という言葉は、古フランス語から派生したもので、文字どおり解釈すると「日が昇る」という意味である。レヴァントは太陽が昇るところで、地中海東部沿岸諸国につけられた名である。レヴァント地方の政治理念とは、それぞれアイデンティティを持つ様々な部族や、村落、宗教団体がお互いうまく折り合ってゆく独特の方法だ。それは東部地中海の地域的結びつきの中で自然に育まれた。そしてそれがベイルートの人たちや、究極的にはレバノン人全体に、自分たちがキリスト教、イスラム教、ドルーズ派など17の多様な宗派を一緒に融合させて、近代的なアラブ共和国を建設することができることを確信させるに至った。レヴァントの理念は、たとえ自分たちの部族的な過去を断ち切れなくても、自分が住む町の出入口でそれらを一時預けることができる、という考えを基礎に据えている。それが最も良き時代のベイルートであった。私が習ったオクスフォード大の教授でレバノン歴史家アル

バート・フーラニは、これを「祖先から受け継いだ宗教的忠誠心や家族の絆の面ではそれぞれ異なりながらも、共通の枠組みの中で地域社会が共存する多元的社会である」と定義している。

5 . このレヴァント精神は産業革命の後、ベイルートで徐々に発展してきた。それはレバノン絹の貿易が始まり、蒸気船の発明もあって、米国や西ヨーロッパの人々がどっとレヴァントに押し寄せた時でもあった。西洋からやってきたこれらの移住者たちはカトリックやプロテスタントの宣教師たち、外交官、商人、ユダヤ人貿易商、旅行者そして医者などであった。彼らは西洋の商業とか、風俗習慣、理念、そして何よりも、人命とか他民族の文化に対する、ある種上品で、かつ率直で寛容な態度をもたらした。地元の人たちのなかのエリート部分がまずこうした風俗習慣を徐々にまねていった。こうした人たちはこれらの西洋の考えと、自分たち独自の寛容の伝統を持ったアラブや、ギリシャ、あるいはトルコ文化を混ぜ合わせ、知的ブレンドともいうべきものを生み出した。フーラニはこう書いている。

「レヴァント人であるということは、二つ、あるいはそれ以上の世界に同時に生きることであるが、そうでありながら、そのうちのどこにも所属しないということである」

6 . ベイルートでレヴァント精神を具体的に表わしているのは市の中心部である。ベイルートの旧市街中心部にあるアーケードの市場やアーチ型石造りの横町、赤い屋根の家々、工芸品を創る作業場、オスマン帝国時代のアラビア風噴水、あるいは古本の露店——リアド・エルソル広場の内外で織りなさせるこうした情景が、共存というレヴァント精神を生み出し、かつ再生産している。ベイルート市の中心部には、かつて 7000 もの店が軒を並べていた。マロン派の靴の修理屋の隣にはドルーズ派の肉屋があり、あるいはギリシャ正教徒の両替商の隣にはスンニ派のコーヒー売り、そしてシリア派の食料雑貨店の隣にはアルメニア人が宝石店を構えるといった具合であった。ベイルート市中心部はあたかも巨大な都会にある高速道路のクローバー型インターチェンジのようだった。そこでは町から村からやってきた人たちが様々なコミュニティをつくり、それらが溶け合っただけでなく一つのコスモポリタン国家を創り上げようとしていた。

7 . 「ぼくが小さい頃、そこに行けば本当のレバノン社会が目に見えた。アクセントも違えば、文化も違い、それに服装も様々な人が寄り集まっていた」。レバノンの社会学者、サリム・ナスルは言う。「そこは一つの国が外部世界と出会う場であり、同時に国を構成している様々な部分がお互いに出会う場所だった」

8 . 第一次世界大戦後のオスマン帝国の崩壊に伴って、スミルナ「イズミールの旧称」や、バスラ、サロニカ、アレキサンドリア、あるいはアレッポで、レヴァントの理念は徐々に締めつけられていった。過去の時代にあった異質の文化や寛容の精神に対する忍耐もしくは関心を持ち合わせていない、ギリシャ人やトルコ人、それにアラブ民族主義者たちが、その息の根を止めたのである。だがベイルートでは、このレヴァント精神は生きつづけた。まずキリスト教徒やイスラム教徒のなかのエリート層が受け入れた。これらレバノンのキリスト教徒とイスラム教徒は結婚し、影響を与え合い、仕事上のコンビを組み始め、そして一緒に新しい理念を生み出した。彼らこそがベイルートを真に

コスモポリタンな、アラブ世界のマンハッタンに造り上げたのだ。そこは政治的急進派のための避難所、そしてアラブの前衛のための新たな出発点であった。クーデターで追い出され、力尽きたアラブ政治家が回顧録を執筆するために来たり、志を抱くアラブ芸術家や詩人が集まってきて、アラブのブロードウェイに仕上げたのである。

9. ベイルートはこのレヴァント精神が生き残るのには理想的な温室だった。イスラム教徒とキリスト教徒の力がうまく均衡したため、一つのグループや民族主義者のイデオロギーを押しついたり、レヴァント社会が必要としてきた雑多な文化混合を葬り去ることができなかった。それどころかベイルートにはレヴァント精神を育成するための強力な経済的基盤があった。天然資源といえば、多種の言語を話す住民の巧妙さと彼らの金儲けの才能ぐらいしかなく、それがヨーロッパとアラブ世界の橋わたしをした。だからこそベイルート人たちは、東のアラブと西のキリスト教徒の仲立ちを演じて利益を得るために、市中心部に笑顔でやってきて、お互いに協力することを学ばねばならなかった。その仲立ちとしての役割は、ベイルートの銀行業務の秘密主義や、カジノや、大胆でみだらなナイトライフによってぐっと強化され、ベイルートはアラブ世界の魅力的なオアシスとなった。それらは当時、ロンドンやマルページャ〔南部スペインの町〕ですら見られなかったものだった。地球上のどの地域でも、法が存在せず、罪深い行為は普通のことであり、金で何でも、あるいはだれでも買える、そんな町を一つくらい必要としている。そんな町として、アジアには香港があり、ヨーロッパにはモナコがあり、そして中東にはベイルートがあった。

#### [コメント]

トーマス・フリードマン氏によって伝えられたこのようなベイルートを今後どうしたらよいか。レヴァント精神を現実のもの、実生活の中で再現するにはどうしたらよいか、最大の課題。

- 2010年7月3日 林明夫記 -